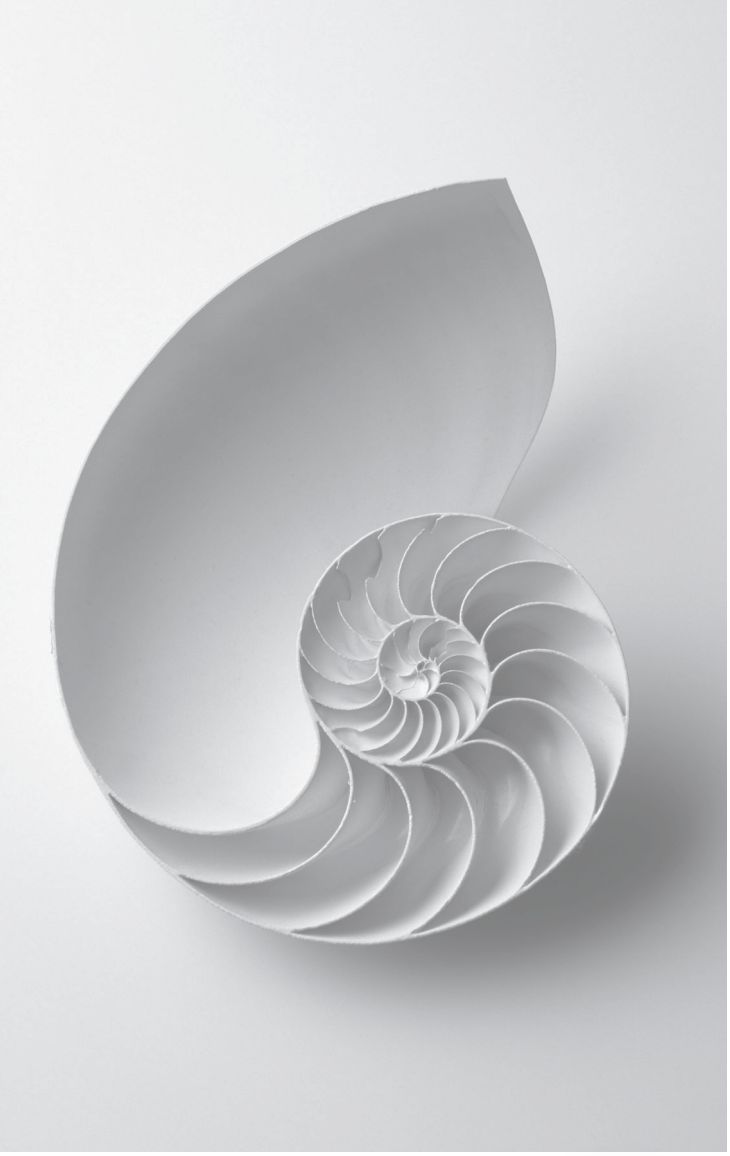
第16回

文窓賞優秀作品集



2022年10月発行

文窓会

神戸大学文学部同窓会

第 16 回　文窓賞
学生レポートコンクール 入賞作品

優秀賞

「「絵」とことば、読書について」
田中　誠士（文学部 1 回生）

優秀賞

「皇帝の使者」
四ツ橋　明里（ドイツ文学専修 3 回生）

優秀賞

「“Don’t think. Just do.”」
薄　まなみ（英米文学専修 3 回生）

佳 作

「学生ボランティアの意義と可能性」
中原　幸子（国文学専修 3 回生）

佳 作

「「現実逃避」も悪くない」
米谷　実紗（国文学専修 3 回生）

選考委員長特別賞

「書くことによって映画を見る」
八坂　隆広（芸術学専修 / 博士課程前期課程 2 年）

◎ **選考会**　2022 年 8 月 12 日
◎ **応募総数**　10 作品
◎ **選考委員**
長坂　一郎　研究科長（心理学教授）
白鳥　義彦　副研究科長（社会学教授）
濱田　麻矢　副研究科長（中国・韓国文学教授）
武藤　美也子　三宅　征彦　廣野　幸夫
吉田　浩次　　中川　伸子　中畑　寛之
津田　薫　　梅村　麦生　西川　京子（選考委員長）

＊今回の選考もメール等で実施しました。

優秀賞

「絵」とことば、読書について

田中　誠士（文学部１回生）

小さい頃に読んだ小説を読み直すとき、ストーリーを覚えているわけでもないのに次に何が起こるのか知っているような気になることがある。ある種のデジャヴュだ。読み進めると、自分と物語が重なっていくような思いがする。無意識にでも覚えているからだと言われればそうかもしれない。しかし、やはり違うのだ。初めて読んだような感覚に間違いはない。自分の中の何かと作品が結びつくのではなく、むしろ自分が作品を動かしているような気にさえなる。ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』を高校生になって読んだときにもそう感じた。

初めて読んだのは小学生の時だった。熱を出して学校を休んだものの、寝ているのにも疲れてちょうど一週間ほど前の誕生日にもらったその本を取り出した。あっという間に読み終え、翌日には熱が下がるとともに物語の世界を意識することはなくなっていたと思う。読んだときのことを比較的はっきりと覚えているのだから、特別な体験であったのは間違いない。しかし、時間が流れ、函に入った本はそのあかがね色の絹の装丁をみせることなく本棚の隅に押しやられたままになっていた。高校生になった。ふとしたきっかけで親しい人に勧められ再読した。すると、その本がまさに今の自分に必要なものを与えてくれるような、今の自分の核となっているところと響き合うような感覚があった。懐かしいようでいながら、当然懐かしいはずであるのだが、むしろ新鮮な体験だった。

そのまま引き込まれるようにしてエンデの著作を読んでいると、この感覚を説明できるようなことをエンデが言っていた。「絵」――イメージ――だ。エンデ自身の思想世界の表出でもある。エンデはこの「絵」という概念にさまざまなところで言及しているが、「情景」と言い換えていることもある。『鏡の中の鏡』では、「因果＝論理的なつながり」を超越した「絵」をつないでいこうというコンセプトを持っていたという。30 のそれぞれ独立した、しかし互いに鏡のように映し合っている短篇からなるこの本には、エンデの父、画家であったエトガーの絵が随所に挿入されている。「精神世界の画家」とも呼ばれるエトガーの絵は美しくもどこか冷たく、卑俗でありながらやわらかいような不思議なものだ。「絵」というのは比喩的な言い方だが、その比喩が実際に示しているのはまさにそのような絵、実態のある絵に近いものなのだろう。

一度忘れた作品の世界をまた新鮮に、それでいて懐かしいように感じる。『はてしない物語』で私が経験したことは、その「絵」をすでに自分の中に「取り込んで」しまったことによるのかもしれない。物語を読むとき、物語はその時々の自分のフィルターを通して通過していく。通り過ぎる物語はフィルターの抵抗を受けるが、そのフィルターの上になにか残すわけでもない。残るのは自分の中を物語がただ「通過していった」という経験だけだ。その経験には、「取り込む」という感覚がぴったりくる。表面上は忘却というはなはだ心もとないことになるのかもしれないが、自分の核と響き合うような感覚

は、そうして取り込んだ「絵」を糧に自分が成長していることから生まれるのではないだろうか。取り込んだ「絵」はすでに私の一部なのだ。

今までにどんな「絵」を取り込んできただろう。それなりにたくさんの本を読んできたほうだとは思う。とはいえ、しばしば聞かれる「今まで読んだ本ベスト5」「人生を変えた本は？」といった質問に答えるのは難しい。面倒な時は「順位をつけるのはいやだから……」などといって逃げるのだが、逃げたくなるのはそんな「ベスト5入りの本」「人生を変えた本」が意識に上ることが少ないからだろう。取り込んだ「絵」は、普段頭の中で再現することはできない。そのような本はもはや自分の一部になっているからである。私は食べたものを消化することで私の体をつくっている。一度食べたキャベツを再びキャベツとして取り出すことができないように、取り込んだ「絵」ももう異化することはできない。意識には上らなくとも、確かに私の血肉となっているのだ。

こんなことを考えるようになって、読書に対する考え方が少し変わってきた。学校を休んだ翌日には「はてしない物語」のことをすっかり忘れて日常に戻ったように、私の読書はもともと読んだらそれきりというものだった。読んだ後何も残らないということにどことなく後ろめたさを感じていたのだ。もちろん読んでいる間は感動するし、この本が大切な一冊になるという感覚を持つことも幸いしばしばあるのだが。小学生の頃の読書感想文は、いつも手付かずのままで夏休み後半を共に過ごす存在だった。読んだ本について、友人に興奮のままに感想を伝えようとしてもうまくいかない。ましてしばらくたてばストーリー展開の細部を覚えていないことすらある。当然なにか役に立つことをその本から学ぶということもない。なんのために読んだのだろう、と空しくなることさえあった。しかし、確実に「絵」は取り込んでいるのだ。その絵は、ふとした瞬間によみがえる。再度その本を読んだとき、電車を待ちながら線路脇に萌え出た雑草を眺めるとき、台風の海の荒れた波音を聴くとき、寒い朝に鼻がツンとしたとき……。ささいなきっかけでも、その小さな体験から何を感じるか、その小さな感動はどこからくるのかを探れば、自分の中に物語がたしかに息づいているのを感じる。それを実感できれば、本を読むことになにか実益を期待することがむしろ間違っているように思われてくる。「忘れて」しまうことを気にせず、その時開いている本が自分の中をただ存分に通り過ぎていけるようにすればいい。そのために、自分の中に目詰まりをおこしているようなフィルターを持たないようにしよう。「絵」は作品の中に確かにあるが、私の中に取り込まれる「絵」はその時々の私のフィルターを通したものだ。「絵」を最大限取り込むためにも、作品とまっすぐに向き合おう。そう考えるようになって、読書を単純に素直な気持ちで楽しめるようになった。

文学を研究するというのは、「絵」を「絵」のままで分析するということなのではないだろうか。絵は「概念を超えて、そのもの自身の矛盾を含んだなにかを表現する手段」だとエンデは言う。いくら形容詞を並べても、絵に描かれた「美しい景色」を完全に言い表し、説明することはできない。その点、絵はことばより「きわめて具体的」なのだ、とエンデは言っている。絵とは直接ことばで表しつくせないものをなんとか表す手段だともいえるだろう。複雑に重なった色彩、慎重な筆の跡、しばしば現実を超えた主題、といったものは、もちろん顕微鏡を使うような視点も必要だろうが、なぜその絵が感動を生むものなのかはその形のままに見なければわからない。「絵」はことばでばらばらに分解できるものではないのだ。「矛盾」を分解すれば解決したように思えるが、その絵に表現された「なにか」の姿は失われてしまう。つまり、

絵の美しさを解き明かすためには絵を絵そのままに見る必要がある。

エンデは「真剣な芸術すべての前提条件」を「難破」だと言う。「本当に敗れさったときです。実際に失敗したことがなければならない。」――作家とは難破した船の遭難者なのだ、絶望を経験しなければならない、とも言う。そうして初めて美しい「絵」を持った作品が生まれる。とすれば、その「絵」を見るときにも同じことが言えるのではないだろうか。「絵」を見る、というのは、「絵」の真正面にことばだけをもって立つ、ということだ。しかし、「絵」を「絵」のままにみるとき、ことばは無力だ。そもそも「絵」の美しさをことばで捉えることができないのなら、そこには絶望にも近いものがある。

文学部での学びは、学ぶ意味そのものを考え続けなければならないものなのだろう、と漠然と思う。「絵」をことばで説明しつくすことができないのなら、なぜ「絵」を見つめ続けなければならないのか。なんとかことばで「絵」をとらえたとして、何の役に立つのか。入学してからすでに度々投げかけられた問いだ。たった今広大な文学の海に出航したばかりの私には答えることはできない。難破するほどの深い海に出るには時間がかかる。目的地に近づき、座礁するほどの浅瀬はさらにはるか先だろう。途中、風に流され、進路を変えなければならなくなることもあるに違いない。それでも、海に出た以上は進み続けなければならない。船にブレーキはないのだ。なぜ文学を学ぶのか、どうやって学ぶのか。考え続け、いつか難破するほどの境地に達したい。

人生を通してかかわり続けていたいと思っていた「文学」と名のつく学部に入って初めての夏を迎える今、こんなことを考えている。

文献

・ミヒャエル・エンデ、田村都志夫聞き手・編訳「ものがたりの余白　エンデが最後に話したこと」岩波書店、2000・2→岩波現代文庫、2009・11

優秀賞

皇帝の使者

四ツ橋　明里（ドイツ文学専修３回生）

君は困っている。

今年から本格的になった対面授業で、数年ぶりに教室に入って授業を受ける、それだけでいいっぱいいっぱいだからだ。

教室に座って、他の学生たちと顔を合わせていることがまだ信じられない。

夢をみているような気持ちで先生の話を聞いた後に教室の外に出ると、青々として澄んだ山と、ぶちまけたように広がる神戸の景色が頭に飛び込んでくる。

なにもかもが別世界で、初めての海外旅行の時の思い出のように、現実味がない。

君は焦っている。

そんな感じなのに、そんな感じだからなのかもしれない、勉強が全然追いつかないからだ。

いつもとんでもない訳ばかり発表して、みんなが呆れているのがはっきりわかる。

研究発表ではあまりに問題作だったので物議を醸した。

ゼミではもうおバカ枠で定着してしまっている。

バカなんだから和ませ係でいいじゃないか、そう思えない君はますますばかだ。

君は悲しい。

家でひとり机に向かって、教科書を見たり問題を解いたりする経験はあっても、自分で調べて発表したり、期限までに課題をやってきたり、そういうことが圧倒的に少ないから慣れてない。

自分なりにやっているのに、なんて思って今日も帰り道にめそめそ泣いている。

家に帰ったら今日もばかなことしたと言ってえんえんと愚痴を言う。

家族も聞き飽きているじゃないか。

勉強が本業なんて言っていられるのは、贅沢じゃないか。浪人に休学に転学に、を繰り返してばかみたいにお金がかかっている君ならなおさらだ。

感謝の気持ちが足りない君はばかだな。

君は悔しい。

文系科目は得意だったはずだ、なんて変なプライドがあるから、自分だって一人前にできるんじゃないかって思っている。

遠くから通学してきて、授業も多く取っていて、アルバイトもしているのに、しっかり予習もして、研究もしている同級生のことが気になってたまらない。どうしているのだろう、どうしたら同じようにできるだろうなんてずっと考えている。

ばかだなあ。

中学も高校も行けなかったお前が、今急に人並みにできるはずがないんだ。

なんでも人に勝たないと気が済まないなんて、自分のことを何様だと思っているんだよ。

君は本当にばかだなあ。

君はずるい。

自分なりに頑張っているんだと言い訳ばかり

している。

頑張って図書館に行っているけど、寝不足で眠いんだ。

早く寝ないと、とは思っているのだけど、なかなか上手くいかないんだ。

頑張って食べられるものを探しているのだけど、難しいんだ。

頑張っていても結果が出ていなかったら、何もしていないのと同じだぞ。

もっとやれることがあるんじゃないか、と言うと、そんな簡単な事じゃないと、出来ないと思い込んでいる、と言うと、自分のことは自分が一番わかっていると言い返してきた。

それがわかっていて、それがわかっていて、何もしないでずるずると生きている君は、ばかだ。

私の横にはいつも、そいつがいる。

そいつは私を冷たく見つめている。

そいつに笑ってもらえることで私は救われるけれども、笑われたことでまた落ち込む。

学期の始めに、「I`m a terrble student.」とか「Ich kann nicht Deutsch gut sprechen.」とか自己紹介するのはそいつのせいで、そいつは私を面白いやつだと思っているけど、でもどこか情けない気持ちが残る。

この半年、そしてその前の半年も、私はふがいない学生生活を送ってきたと思う。

一生懸命やっているというのは本当に自分への言い聞かせ、言い逃れの呪文のようなもので、実際は逃げて甘えてばかりだった。

寝過ごして遅刻したり、遅刻予習のデータを無くしたり教科書を忘れたりというミスがあるのは、生活が安定していないから。

授業に集中できないほどおなかが空っぽな時や眠い時があるのは栄養が足りないから。

授業後の帰り道、わざと回り道をしてスーパーの安売りを見に行くのは、食事への興味をそらすため、そして沢山歩いて体力を消耗するため。

夜遅くに起きて活動することで、現実から逃げようとした。何にも役立たないことに時間と体力と気力を割いている現実から。授業中は寝てしまうのに、しょうもない動画を延々と見ている現実から。一銭も稼がずに家計をむさぼっている現実から。将来の方向が見えてこない現実から。

頭の中はいつも８割以上、目の前にないことで占められている。

冷蔵庫の中身、今日食べたもの、これから食べるもの、今週の残り金額と、安売りの日程と。

そして体はいつも疲れ切っていて、脳に余裕などどこにもない。

そんなことでは勉強がはかどるはずがなかった。

わかっている、わかってはいるんだ、と言い訳し続けてもう何年になるだろう。

どうしようもない自分の面倒をみられる人はもうどこにもいない。

夜遅くまで起きてごそごそしている私のせいで、家族は寝られなくなってしまった。

逃げるために使われた水とハンドソープとティッシュペーパーとで訳の分からない出費は増え続け、いつまでも病院通いするせいで医療費がかかり続けている。

床までちらかし放題の部屋、その癖消毒しまくって壊れた電子機器の数々、使い倒されて壊れたレンジ。

それらを横にして、ドイツ語が出来ないとか、就職はどうしようとか、そんなことばかり言う私に、誰もが「現実をみろ」「ばか」と言いたい

に違いない。そいつはいつも私に言ってくる。

でもそいつは何も私に教えてくれない。どうしたら私の面倒をみられるのか。誰が私の面倒を見られるのか。私の何が悪いのかということ。私に何が出来るのかということ。

ばかだ、ばかだ、とは言うけれど、何も、何も教えてくれない。

いつも隣にいるのに、いつも私を見ているのに、どうして何もわからないのだろう。どうして何もわかってくれないのだろう。でも何をわかってほしいのかもわからない。そいつだけには、言い訳を聞いてほしくない気持ちもある。そいつだけには、いつもばかにされていたい。そいつに優しくされたら、もう私は終わりだから。

―彼はなんと無益に骨を折っていることだろう。いつまでたっても彼は宮殿の奥深くの部屋部屋をなんとかしてかけ抜けようとするのだ。だが、けっしてその部屋部屋を抜けきることはないだろう。そして、もしうまくかけ抜けたとしても、何一つ得るところはないだろう。つぎにはなんとかして階段をかけ下りようとしなければならないだろう。そして、その階段をうまくかけ下りることができても、何一つ得るところはないだろう。―

吹けば飛ぶような、取るに足りない存在の君のもとへ、一人の使者は駆け続けている。死の床にある皇帝から預かった大切なメッセージを届けるために。

文学部に入って最初の学期に受けた、文学入門で初めて知ったこの物語、初めて聞いたときはなんだそれ、と思って終った。不条理文学なんて、変わったジャンルもあるものだ、でも読んだ後もやもやして気持ち悪い。その物語の気持ち悪さとどうしようもなさがこんなにも心に響く日があるなんて思ってもみなかった。説明できない謎をはらむ物語の深さに引き寄せられて、いつの間にかやってきたドイツ文学専修は、優秀で素晴らしい学生ばかり。カフカの作品を読み進める今期の授業では、ひとりひどい状態のまま、学期末を迎えてしまった。ドイツ語の上達を目指す授業だから、頭は文法や単語でいっぱいになるべきなのに、私は先生の日本語に、耳を奪われていた。

―だれ一人としてここをかけ抜けることはできないし、まして死者のたよりをたずさえてかけ抜けることはできない。――だが君は、夕べが訪れると、君の窓辺に坐り、心のなかでそのたよりを夢想するのだ。―

鼻をかんでいるふりをするので精いっぱいだったと思う。

私のところにも、いつか、だれかが大切なメッセージを持ってきてくれる、そして、今も私のところを目指して、だれかが懸命に走っているのだ、と思うと、涙があふれて、これを書いている今も、防水でないノートパソコンが危ない気がしている。

横にいるそいつにも、私にさえも面倒が見られない私。私から抜け出す方法はなくて、毎日、ふがいない日々を同じように積み重ね続けている。

考えれば考えるほどに詰んでしまうこの今、遠くで群衆をかきわけている使者を想像すること。彼がいつか届けてくれるメッセ―ジのことを考えること。

それは、むなしくも、悲しくも、私のできることのひとつ、持てる希望のひとつだ。

文窓賞の募集要項には、「元気で個性的な学生生活」「社会を納得させる力のある目標、行動力」という観点から評価する、と書かれている。

こんなに後ろ向きで、小さな世界で完結している文章は、はなから選考外になってしまうだろう。

ばかな劣等生が、訳の分からない病気なのか性格なのか考えなのか癖なのかについて頭を悩ませ、諦め、絶望している様子なんて何の意味もない。

それでも、いつか、皇帝のメッセージを受け取って、この文章を笑って読んでみたい。

私が私の面倒をみられるようになる日。ひとまずこれで、及第点だと言ってやれるような日。使者は人込みを掻き分け、広い部屋を通って、階段を降りて、それをいくら繰り返しても、宮殿からでることすら叶わない。だから、そんな日がやってくるのかどうかはわからない。本当に、物語の中の使者がやってくるのと同じくらい、今の私にとって、そんな日がやってくるのは想像もできないことだ。遠い先にそんな日があるのかすらわからない。

それでも、それでも、そんな時期もあったなあと、私もそれも、周りの人も、優しい笑顔でいられる日々が、いつかやってくるのを願っている。「君」が窓辺で、使者を待っているように。

引用

フランツ・カフカ「皇帝の使者」原田義人訳　青空文庫

https://www.aozora.gr.jp/cards/001235/files/49860_41920.html

優秀賞

“Don’t think. Just do.”

薄　まなみ（英米文学専修３回生）

2022 年 5 月 27 日は、戦闘機好きには待ちに待った日だったであろう。1986 年に公開された「トップガン」が、36 年ぶりに続編「トップガン : マーヴェリック」として帰ってきた。1986 年に公開された「トップガン」は、パイロット養成学校を舞台に、トム・クルーズ演じる maverick（マーヴェリック）が、仲間たちと共にパイロットとしての腕を磨きながら、恋や青春を謳歌する一方、仲間の死を経験し、自信の喪失や死の恐怖と戦いながらも、養成学校を卒業後大きな任務を成功させ、最後には教官としてトップガンに戻るという話である。2022 年の「トップガン : マーヴェリック」では、トップガンに再び教官として戻り、かつての相棒の息子を含む訓練生に非常に難易度の高い任務を遂行するための訓練を行う。空の美しさや飛ぶことの楽しさだけでなく、空に挑むことや誰かを守ることの厳しさも知っているマーヴェリックが訓練生たちと挑む任務は、マーヴェリック自身と彼を取り巻く人々との愛と友情のもとに成り立っている。映画についてもっと語りたいのだが、このあたりでやめておく。さて、お気づきかと思うが、私もこの映画の公開日を待ちに待っていた戦闘機好きの 1 人である。今までは趣味の範囲にとどめていたが、最近は他学部のゼミに参加したり、シンポジウムに参加したりしながら、安全保障分野への知見を広めている。そのような場に参加し、様々な方々と話すと、「え？文学部？」と言われる。文学部生で安全保障分野に興味を持って、自衛隊の今後の在り方や日米同盟について考えていることは、珍しい部類に入ると自覚はある。5 か月ほど前の私だったら、時間がない、そんなことしても意味がないなどと消極的に考えて、文学部の勉強に加えて、他分野の勉強をしようなどと思わなかったかもしれない。しかし、自分の興味・関心のある分野を思う存分突き詰めることを楽しいと思える場、そして “Don’t think. Just do.” でいい、と思わせてくれる仲間との出会いが、私を大きく変えた。

その出会いとは、第 74 回日米学生会議である。2 年生も終わりかけの冬、私は大学に入学してからの 2 年間を振り返って、「これをやった！」と胸を張って言えることがないことに気が付いた。新型コロナウイルスを言い訳にするのは簡単だが、それを言い訳にしたところで、私が得るものは何もない。そんなモヤモヤを抱えていたときに、SNS で見つけたのが日米学生会議だった。実は、大学入学前から日米学生会議の存在は知っていたが、大きなプログラムであったうえに、全国から集まる大学生からたった 28 名を選ぶという選考に尻込みして、その存在をすっかり忘れていた。しかし、何かに挑戦するなら 3 年生が最後のチャンスかもしれないと思い、「選考に落ちるかもしれない…」などと深く考えずに応募してみた。応募したからには絶対に合格しようと小論文や面接の練習をする中で、文学を学ぶ意義、自分が将来何をしたいのかなどを、時間をかけて深く考えた。

大学入学時は、東洋史を専修しようと思って

いた私だが、現在は英米文学専修に所属している。英語を勉強できると思い、英米文学専修を希望したため、文学作品を研究することに熱い思いがあったわけではない。それゆえに、英米文学の授業で、英文小説を訳し、普段使わないような単語の意味を必死に調べているときに、「私はこれを学んで、将来何の役に立つのだろう」と考えてしまった。しかし、2年生の後期に、2019年に公開された“Little Women(若草物語)”の映画に関するプレゼンテーションをして、私なりの文学を学ぶ意義を見つけた。1869年にルイーザ・メイ・オルコットが発表した原作と2019年版映画を比較したり、登場人物の台詞や衣装、映画監督に着目したりして映画を分析していく中で、文学作品を通して時代の変化や社会背景を読み取ることの楽しさを覚えた。1869年に書かれた原作“Little Women”では、作者のルイーザ・メイ・オルコットは物語の中で主人公を結婚させるつもりはなかったが、結婚が当たり前だった当時の読者からの抗議や編集者の圧力があり、主人公が結婚するという物語を書いた。しかし、2019年に公開された映画“Little Women”では、主人公の結婚は明確に描かれておらず、観客は結婚したと解釈することもできるが、していないとも解釈できるように描かれている。つまり映画では、受け手（観客）に、原作では描かれている「結婚」にとらわれないエンディングが提案されているのである。時代によって作品の描き方が異なることは、時代の文化的かつ社会的風潮の変化を示唆していると言える。文学作品を分析する方法はたくさんあるが、私はこのプレゼンテーションを作ったときに、文学作品と社会をつなげて考えることで、「社会を生きるうえで役に立たない」と言われている文学を通して、時代や社会を分析することができるのではないかと考えた。

以上のような、私の文学に対する考えや展望を小論文にまとめたり、面接で熱弁したりした選考に通過し、私は第74回日米学生会議の一員となった。日米学生会議とは「世界の平和は太平洋にあり、太平洋の平和は日米間の平和にある。その一翼を学生も担うべきである」という理念のもと、1934年に創設された日本初の国際学生交流プログラムである。4月から本格的に始まったこのプログラムは、4月末に行われた春合宿や、横須賀米軍基地や航空自衛隊幹部学校への訪問を行った安全保障研修、その他フィールドトリップを含む国内研修を経て、今年の8月に約1か月間アメリカで本会議が行われ、日米両国の学生が、世界の様々な問題に対して議論や活動を行い、日米両国の参加者の相互理解を深める。春合宿で、初めて対面で他の参加者に会い、早速始まったのは、議論的自己紹介だった。「〇〇大学の△年生の××です」などという自己紹介などない。「日本は武力を強化すべきである」「捕鯨は禁止すべきである」などのトピックに対する自分の意見を述べることが、自己紹介である。つまり、それぞれのトピックに対する自分の意見を表明することで、自分という人間を知ってもらうのである。そのような自己紹介で始まった春合宿の3日間は、朝起きて夜寝るまで、1日中誰かと議論をしていた。ご飯を食べながら歴史を学ぶことの意義について議論し、お風呂に入りながらジェンダーについて議論をした。不思議なことに、これらの議論は自然発生的に起こるのである。そして私は、自然に議論が起こる空間に自分が存在して、その議論に参加していることが心地よかった。一方で、痛烈に自分の知識不足や無力さを感じた。理系や文系、年齢に関係なく日本各地から集まった参加者は、勉強していることやバックグラウンドは多種多様である。私が一番驚いたのは、参加者たちは自分の専門分野の知識はもちろんだが、他分野へも興味・関心を持ち、その知識を幅広く持ち合わせていたことである。私は大学に入って、「文学部だから文

学に関係する勉強だけをしておけばいい」と考えていたことに気が付いた。その考えは私の視野を狭くし、知識の吸収を妨害していたように思う。

衝撃を受けたり、反省したりした春合宿のあと、文学作品と社会をつなげながら作品を読み解く方法をさらに深く模索しながらも、次に控えた安全保障研修に向けて、日米同盟や日本の自衛隊を取り巻く環境などの勉強を始めた。日米学生会議参加者の中で安全保障分野を専門に勉強している人に教えてもらいながら、安全保障に関する本を読んだり、日米同盟の意義などを考えたりした。もともと航空自衛隊に興味があったこともあり、趣味として楽しんでいたことに、知識が加えられていく過程にワクワクした。

安全保障研修では、横須賀米軍基地と目黒駐屯地にある航空自衛隊幹部学校を訪れた。米軍基地では米海軍の方から日米同盟や在日米軍の重要性、海軍の方々が日米同盟をどのように受け止めているのかなどについての話を聞いたり、基地内を見学したりした。一方で航空自衛隊幹部学校では、米国大使館駐在武官の空軍大佐に日本が安全保障において抱える国内外の問題について講義をしていただいたり、航空自衛隊幹部の方々に、日米同盟をどのように受け止めているのか、自衛隊と米軍の関係などの話を聞いたりした。日米両サイドの関係者の方々に話を聞いたことで、日米に共通する同盟に対する姿勢や日米関係が続くことの重要性を、報道や人から聞いた話を元にその重みを感じるのではなく、自分自身の感覚をもって再認識した。

日米学生会議に参加し、様々なことを考え、挑戦している学生に出会ったことで刺激を受け、私自身も学部や今現在やっていることに縛られることなく「やりたいことをやる」という姿勢を得ることができた。時間やお金、将来への不安など考え始めれば、途方もない闇に迷い込み、実際に日米学生会議に参加する前の私は、それらの闇から抜け出せずにいた。しかし、考えても終わりのないことを考えてもしょうがない。自分が一歩踏み出さなければ何も始まらない。踏み出すこともせずに悩んでいては、悩んでいることさえも無駄になる。合格するか否かを深く考えずに日米学生会議に応募したときのように、考えすぎずに、とりあえず行動するという姿勢を大切にしたいと思えるようになった。

映画「トップガン：マーヴェリック」の中で、主人公の maverick（マーヴェリック）が、パイロットになった、かつての相棒の息子であるルースターに “Don’t think. Just do.” と言い放つ。考えすぎていたら命を落とす世界にいるマーヴェリックのこの言葉は、慎重で空の中でも理論的なルースターを鼓舞し、彼の命を守るために放った、愛情から湧き出た言葉である。私がこの映画を見て、数えきれないほどの台詞の中から、この一言が心に刺さった理由は、まるで自分に言われているような感覚に陥ったからだと思う。このマーヴェリックの一言は劇中のルースターだけでなく、約２年もの間、コロナで思うように活動できずに思い悩んでいる私を含む多くの人に向けてのメッセージだと感じた。このメッセージを受け取った私は、今現在、新たな夢に向かって勉強している。日米学生会議に挑戦しようとした時期には、自分が何をしたいのか、英米文学を勉強していることそのものにすら不安を抱えていた。しかし、勢いで選んだ英米文学専修で、アメリカ文学を学んでいるからこそ、日米学生会議と関わりを持つことができ、最後のチャンスだと思い、とにかくやってみようという気持ちで日米学生会議に応募し、参加することができたからこそ、安全保障を深く勉強することに目覚め、安全保障に関わる仕事をしたいと思うようになった。“Don’t

think. Just do.” という言葉は、私を変えたすべての始まりである。

文学部の “maverick（異端者）” から、コロナなど思いがけない出来事に直面し、思うように前に進めない人々へ、そして、何かに挑戦しようと思いながらもなかなか勇気が出せない人々へ。

“Don‘t think. Just do.”

佳　作

学生ボランティアの意義と可能性

中原　幸子（国文学専修３回生）

私は神戸大学に入学し、サークルでボランティア活動を始めた。具体的には公園清掃、障がいを持つ方との交流、復興祭の運営、災害派遣などである。「サークルなにしてるの？」と聞かれ「ボランティア」と返答すると「就活のため？」と聞かれたことがある。この場合に限らずこの会話での相手の反応は、ほかのサークル活動を答えた場合とは少し違うだろう、と私は感じている。「ボランティア」と言われると「無償で、誰かのために」という印象があり、あらゆるサークルの中でこの活動を選択することにはなにか含蓄があろうと考えられるのだろう。

私がボランティア活動を選択した理由には「無償で、誰かのために」というボランティアの性質とは直接関係しない。中学・高校で吹奏楽、駅伝、山岳の活動を通して感じたのは、技量才能が比較的関係しない活動をしたいという気持ちであり、これにあてはまり始めやすいのがボランティアであったことがひとつである。もうひとつは、教師を目指す私にはコミュニケーション力が足りないという悩みの中、ボランティアの活動は人との交流が主であるため、先輩方や活動先の人々を通して人との関わり方を学べるのではないかと感じたからである。いたって自分本位な理由から始めたボランティアであるが、特に災害関連の活動を重ねる中で学び、考えさせられる場面は多くあった。それらを踏まえて、災害ボランティアをすること、特に「学生が」することの意義とその可能性を考えてみたい。これには答えがあるわけでも、あるべきでもなかろうが、私なりの、自分の中での答えを示したい。

まずひとつ言えるのは、学生のボランティアには、「若さのパワー」が使えることである。これは災害後の家屋の片付け、がれき撤去に労働力として役に立つことはもちろん、物理的支援以外での精神面の支援、会話などの交流を通した支援においても言えることである。2019年に台風19号の被害を受けた宮城県丸森町を訪れ、住民の方にお話を聞いた際、子や孫が遠くに出ているから、若い人が話せることがうれしい、という言葉を多くいただいた。また、災害、復興に関わる活動をする際に若い人が考えてくれることがうれしい、と言ってくださることが多くあった。無条件に使える能力が、「若さ」である。

「若さ」を武器に活動を行っても、ボランティア活動には疑問も多く感じる。私の関わるボランティア活動は、神戸という場所も関係し、震災から始まり定着しているものが多くある。公園清掃や復興祭も震災契機のものである。20年以上経つと活動自体に「災害」の色は消え、その原点に戻って考えることは少ない。復興住宅でお茶会を行い、災害から数年後に被災地を訪れ、ただ日常のたわいない話をし、災害に触れずに活動を行うことにはどのような意味があるか、と考えるようになった。もちろん災害で住む場所が変わり、これまでの近所づきあいや交流の機会が減少するご高齢の方々に会話や交流の場、簡単な工作や手芸の機会を持ってもらうということには意味があると思う。しかし災害支援という本質からずれてはいないか、災害の支援はどこかで区切りを入れるべきではないか、という疑問も生まれる。

災害支援や災害契機の活動に参加していて感じたこの疑問は、先日私が所属している学生震

災救援隊の結成初期頃にメンバーであったOBの方の講演を聞き、自分なりに決着がついた。阪神淡路大震災から発足した救援隊が形を変えながら今につながる経緯を聞く中で、印象に残った言葉がある。ボランティアは、「支援から自助、互助へ」。災害の後、ボランティアは支援を行い、それは次第に、被災者が支援なくとも自分で生活できるように、また発災したとき互いに助け合える関係性の構築へ。片づけたり、食事を提供したり、お風呂を用意したりという発災直後に必要なニーズは永久ではない。新しい住居やコミュニティに入り生活する被災地の方が自分自身で充実した生活を送る「自助」にはなにが必要か。「交流の場が欲しい」「〜という不満がある」という「声」を聴きだせるのが片付け作業などにはない精神的支援、会話やレクリエーションなどの交流の機会であり、私がメインで行う活動である。交流の場を作ることは単に居場所づくりや会話の機会の構築というだけでなく、個人個人の「復興」にも関わるのである。行政の行う復興は、住居の修復や公共施設の防災対策、修繕、金銭面での支援など、大学生には到底力の及ばない核をなす作業である。しかしその支援には、災害国の日本では比較的充足しているといいつつも、個人のフォーカスには限界がある。「居場所作り」「交流の場」としての話の機会が個人の復興へのニーズの聞き取りに役立ち、被災者の「声」として復興へ必要な課題を浮かび上がらせる。

この「自助」へのボランティアも、比較的発災から数か月、数年の規模になるだろう。震災の傷や体験が消えることはないだろうが、阪神淡路大震災のように数十年を経ると、今度は「互助」についてのボランティアが存在感を増してくる。「互助」は「互いに助け合うこと」であり、このためのボランティアとは「災害の時に助けを求められる人脈の構築」を目指すものである。震災を契機に今も続くボランティアには、交流の機会の提供などの意義のほかに、震災・復興につながる「互助」の関係の構築も含まれている。震災から続く活動を今も続けていくことには、防災につながるこのような意義があるのである。

活動の目的や根本の意義についての疑問を自分なりに解決でき、さらに感じたのはこの「互助」を「学生が」行うことこそ、大きな意義があるということである。先述した講演会、さらに東日本大震災についての講演会でも同じように言われていたのが、ボランティア支援を受ける側だけでなく、する側のメリットについての話である。別の地域から越してきた大学生の居場所づくりとしてのボランティアというあり方や、知らない土地に越して来て、大学を卒業すれば土地を離れる可能性の大きい学生が「地域」に関わることの意義を学んだ。学生がコミュニティを形成し居場所づくりをできる機会は、ボランティアに限らず別のサークル活動でもできるだろう。しかし、「地域」におけるコミュニティや居場所の存在は、ボランティアを通してこその産物である。災害時に必要になる地域の連携や土地の歴史、災害、復興の歴史に触れることは、私たち大学生自身の防災に大きく貢献しているのである。土地勘のない別の地域から来て、定住したり行政と関わったりせずその土地を去る可能性の大きい大学生が、「互助」を目的にボランティアを行うことで、逆にそれを享受できているということである。災害時に大切になる地域の人と人との横の繋がりは、地元を離れ進学した大学生は持ち合わせておらず、繋がりを構築する機会も少ない。一番地域コミュニティに疎いであろう学生が行うボランティアには、自分自身の地域との横の繋がりの構築を助けるという、学生が行うからこそ増す意義が存在している。

さて、このように「学生の」ボランティアの意義を考えたが、大学の本業として国文学を選

考する私は、学問とボランティアの関連について見いだせずにいた。関連性などなくとも支障はないが、被災地訪問で同じ活動のメンバーがしていた質問では、保健学科なら災害後のメンタルヘルスの仕組みについて、工学部なら防災建築についてや土地・家の作りについてなど自分の専門に関連するものが多くあった。私の学問は、災害支援やボランティアにおいてどのように可能性を広げられるか。

一度目の宮城県への派遣では見つからなかったこの問いの答えの一端を、今年５月に再び訪れた派遣活動先で見ることができた。一度目の訪問で被災の地を直接訪れた際に、自身の被災の状況やその後の防災への取り組み・復興についてお話しいただいた住民の方が、あるパンフレットを見せてくださった。映像作家の方と画家の方で震災の風景と語りの記録に取り組む活動で、東日本台風の様子を語り継ぐ展覧会のものである。パンフレットには山からの土砂災害の様子がアーティスティックな絵で描かれていた。この企画に関わり紹介いただいた住民の方は「災害も、絵にしてみるとまた違って見えるものだ」とおっしゃっていた。アートと災害という違う分野の融合を見た場面である。また、別の機会だが、「文学の専攻が、災害支援とつながる場面ってどこだろう」とお話しした際に、災害の様子を絵本にしたものを見せていただいたことがある。子供にもわかりやすい言葉と絵で、震災継承をする。一見絡まない分野が震災に、防災に関わっていた。先述した東日本大震災の講演会で、防災に関わる職にはどのようなものがあるかという質問があった。そこで、「どんな仕事でも、震災、防災につながる。例えばアイドルだって、慰霊コンサートという形で関わっている。」という回答があったのが印象的だ。自らの専攻との関連性など見いだせなかった私には大きな学びだった。専攻と絡めたり、関連性の見えない分野と震災や防災を絡めたりすることが必要、というわけではない。しかし、自分の学ぶ内容を震災や防災に関連させその領域を広げることができるし、その逆に、震災や防災の捉え方や継承の仕方を私の専攻分野で広げることができるかもしれない。これは震災に限らずとも別の分野にも言えることで、私の中では大きな気付きとなった。

はじめは自分中心の動機で始めたボランティア活動で、たくさんの貴重な体験と学びを得た。ボランティアは無論、「誰かのために」あるものだ。それをもちろん他人のための活動と見てもよいし、自分のための活動と見てもよい。どちらにしろ、「学生が」ボランティアをする意義は存在し、どんな動機であれ巡って自分の糧になり、気づかずとも自分を成長させている。少なくとも私はそう実感し、信じて、今後も活動を続けていく。

佳　作

「現実逃避」も悪くない

米谷　実紗（国文学専修３回生）

はじめて見る宵山の風景は、予想していたような優雅なものでは無かった。人、人、人、人、通行止め。屋台、通行止め、通行止め、通行止め。ごっつい望遠レンズのついた一眼レフをいくつもぶら下げた人、縁石にしゃがみ込んで焼きそばを食べる高校生。「止まらないでくださ〜い。ゆっくり歩いてくださ〜い。」ガードマンさんは必死に叫んでいるけれど、長刀鉾が見えてくると、四条通は渋滞を起こす。とにかく熱気がすごかった。私は人波に流されながら、マイペースに蟷螂山を探していた。

私は焦っていた。

3回生になって、本格的な対面授業が始まった。私には取得するべき単位がモリモリあったので、週に5日大学に通う日々が始まった。何故か週に3日も5限の授業があり、暗い街を歩くことが増えた。

3回生になって、何故か部活で部長になった。対面新歓をしたら、新入生がモリモリ入ってきた。意外と多くの人が、美術に興味があったようで驚いた。3年目にしてやっと、部室を使えるようになった。有難い話である。

3回生になって、卒業後の進路を考える必要に迫られた。ガイダンスを受け、適性診断を受け、自分史を作っても、イマイチぴんと来なかった。証明写真機で急いで写真を撮って、エントリーシートに貼り付けた。お祈りメールにはまだ慣れない。

選挙には行った。お酒も飲める。成人はしたけれど、大人になった気はしない。周りの友人はどんどん先に進んでいくのに、自分だけ突っ立ったままで、取り残されていくような気がした。

私は焦っていた。気持ちだけが走っていて、思考とか、行動とか、そういったものが全く追いついていなかった。「あれもしなきゃ、これもしなきゃ」そう思っているうちに、6月は終わった。梅雨が明けて、物価もどんどん上がっていった。

7月半ばの三連休初日、期末試験が近づいていて、レポートを書き始める必要があった。テスト勉強もしないといけない。それなのに、折角早起きしたのに、机の上に大量のプリントを積んだだけで、Wordファイルの文字数は一文字も増えちゃいなかった。やらないといけないことは沢山あるのに、気持ちが焦って何も書けない。3時間唸ったけれど、進捗ゼロ。どうしようもないので、焦るのもやめて、本を読むことにした。「遂に、こいつは自分の人生に対してなげやりになってしまった」と評価する人もいるかもしれないが仕方がない。私は元来マイペースなのだ。

居間の茣蓙の上に横になって、森見登美彦氏の『宵山万華鏡』をペラペラめくる。この日はファンタジーの気分だった。『宵山万華鏡』は、宵山の京都を舞台にした短編集である。読み進めるうちに、ふと、「そういやあ、今年は祇園祭やるんだったかな」と思い、床に寝転がったまま、座卓の上のケータイに手を伸ばした。調べると、14日から16日が宵山らしい。今日は16日である。タイミングが良すぎた。家に居たところでレポートが進むとも思えない。私は宵山に行くことにした。

最寄駅から阪急に乗り、十三で特急に乗り換えて烏丸まで行く。宵山を見て、帰ってくる。

旅程はシンプル。急に思い立ったことなので、勿論一人で行くことになる。「プチ一人旅」その言葉の響きに、少しワクワクした。最寄り駅から十三までは、特にこれといったお祭りらしさもなかったが、十三まで来ると浴衣姿の女性客をチラホラ見かけた。高槻で人がどっと降りて、乗ってきた。桂まで来ると浴衣姿の人がぐっと増える。甚平を着せてもらった子どもとか、帯に団扇を挿した人とか、祭りでしか見ることもない人たちがいる。コロナ渦で2年間、花火大会や祭りに行くこともなかったので、なんだかそういったものが、少し新鮮に見えた。

烏丸駅で降りると、改札には青い制服を着た警察の人が立っていた。地元の祭りではまあ見ない光景である。駅で地図を貰って、大丸の脇から四条通に出た。17時過ぎ。街はまだ明るいが、既に祭りの雰囲気で満ちていた。歩道は祭りを見に来たらしい見物客でいっぱいである。清水寺行のバスとすれ違う。少し先に、長刀鉾が見えた。小学生の頃、一度山鉾巡行を見に来たことがあるから、約10年ぶりだ。駆け出したい気分だったが、人ごみの中でそんなことはできない。四条通が歩行者天国になるまで、私は喫茶店で時間を潰すことにした。緑色のミックスジュースを飲んだ。なにやら甘くて優しい味がした。そして、思った。

「ああ、私、今、「現実逃避」してる」

こんなことを書いても虚しくなるだけだが、私は「現実逃避」が大好きである。ファンタジー小説を読んだり、少女漫画を読んだり、旅行に行ったり、非現実的なことを考えたりするのが大好きである。絵を描いたり、自作の怪しい小説を書いたり、妄想を膨らませたりするのも大好きである。

たとえこんな感じでも、現実世界への関心が大きく、積極的に人とコミュニケーションをとれるタイプであったなら、特に問題なかったかもしれない。ところがどっこい、私はそんなタイプではないらしい。自分では認めたくないのだが、父曰く「昼行燈」であり、友人曰く「霞食って生きてそう」で「頭にお花咲いてそう」なのが私であるらしい。お恥ずかしい話ではあるが、私には、多分、少しばかり浮世離れしている部分があるのである。

そんな私には、「浮世離れ」の他に、「頑固」「泣き虫」「早とちり」それに「緊張しい」という弱点もあり、まだ始めたばかりの就職活動でお祈りメールをいくつも頂いていた。コロナ渦で、実家でのんびり過ごしていた2年間の反動か、諸々のストレスから眠りが浅くなり、涙が止まらなくなってしまった。仕方がないので親には言わずに勝手に就職活動をお休みし、勉学に集中しようとしたものの、それもなかなかうまくいかない。まあ、人生そう上手くいけば誰も苦労しない。泣くだけ泣いて、ウジウジ考えた結果、「まあ、なるようになるさ」と思い、他のことを放り出して小説を読みはじめるまでがいつもの流れなのだ。時にはそのままその作品の舞台になった町へと「聖地巡礼」に向かう。岩美町、熊野、東尋坊、小豆島、千里山。行った先で美味しいものを食べ、観光名所を巡り、駅で記念撮影でもすれば、だいたいご機嫌になる。（私の周りの人たちは、この私の行動を「現実逃避」と呼ぶ。専門家の先生から「極めていい加減な使い方だ」と怒られるかもしれないので、ここでは「」で示しておく。）

私はミックスジュースを飲みながら、これがいつものパターンであることを自覚した。致し方ない。今回は家から飛び出してしまっている。京都まで来た電車賃を考えれば、冷静になったからといって、祭りを堪能せずに家に帰ってしまうというのはあまりにも勿体無い。自分にそう言い聞かせ、私は宵山を楽しむことにした。

長刀鉾、函谷鉾、月鉾、岩戸山。芦刈山、木賊山、油天神山、太子山。喫茶店を出て、地上に戻った私は、歩行者天国になっていた四条通

をぷらぷら歩き、新町通を南に下がり、途中で出会った天神様にお参りをしてから、綾小路通をふらふら歩いた。四条通のあたりは、背の高いビルや商店が並び、歩くので精一杯だが、少し東に行ってから一本南に入れば、スキップができそうなくらいに人出がまばらになった。道幅もぐっと狭くなり、両脇には町屋がひしめきあっている。日も落ちて、空の色は薄い水色から、群青色に変化していた。20分も歩いていないのに、なんだかさっきとは全く別のところに来たような気分である。

すれ違うおじさんたちがビールを飲んでいるのが羨ましかったが、一人で、土地勘もない街で酔っぱらってしまうのは少しリスキーだ。私は途中で赤しそのソーダを買って、それの代りにすることにした。炭酸独特の苦みと、赤しそ独特の風味が合わさって、乾いた喉を潤した。ラムネ、コーラ、サイダー、特に意味があるわけではないのだが、私は祭りでしか炭酸を飲まない。非日常の飲み物は私を非常に愉快な気持ちにさせた。このあたりまで来ると、終らないレポートや先の見えない就職活動のことはすっかり私の頭の中からサヨナラしてしまい、後に残ったのはなにやらフワフワとした愉快な気持ちと、この祭りへの好奇心であった。

私はそのまま油小路通を北上し、四条傘鉾へ向かった。大きな傘の乗った鉾の前では、子どもたちが祭りの衣装に身を包んで立っていた。町の子だろうか。宵山では町の子らしい子どもたちをよく見かける。厄除け粽を売る親御さんの手伝いをしていたり、鉾の前に立っていたり。1000年以上続く「祇園祭」は、親から子へ、受け継がれてきたのだろう。人一人では1000年なんて到底生きられない。それこそ「霞食って生きる」仙人でもないと。

そこからカマキリのからくりで有名な蟷螂山を見て、烏丸の方へとふらふら歩き、さらにもう一度四条通を通って大宮まで行って、私の宵山探検は終了した。四条大宮から嵐電に乗り、さらに阪急に乗り換えて、地元へ帰る。窓の外は真っ暗でよく見えないが、かわりに自分の顔が反射して、見えた。窓に映る私は、人波にもまれて疲れているはずなのに、不思議と今朝よりも元気そうに見えた。

「現実逃避」というのはあまり褒められた行動ではないかもしれない。できたら泣き虫は早めに卒業して、困難なことにも逃げずに、冷静に、対応できる大人になりたいものだが、当分は難しそうだ。結局私はマイペースなままで、「現実逃避」の読書をし、そして時々旅をするのだろう。それは、課題の根本的な解決にはならないけれど、身心の健康のためにはとても大事なことなのだ。そして、思っていたよりも色々なものを見せてくれるものでもある。

さあ、次の「現実逃避」は、私に何を見せてくれるのだろうか。

参考文献

・森見登美彦『宵山万華鏡』（集英社、2012）

選考委員長特別賞

書くことによって映画を見る

八坂　隆広（芸術学専修／博士課程前期課程２年）

映画を見るプロセスに、「書く」を取り入れることを提案してみたい。目と耳を使う映画鑑賞とは別のスタイルとして、書くことを介して自分が見えていなかったものを発見する方法の提案である。喩えるならば 29 × 87 を筆算するときに紙に鉛筆で計算の過程を書くのとちょうど同じように、見る過程に書くことを取り入れるのは可能であり、かつ見るためのもっと良い方法たりうるだろう、という話である。

筆者がこれを思いついたのは、二〇二二年に公開されたハリウッドの大作娯楽映画『ドクターストレンジ：マルチバース・オブ・マッドネス』（以下、「MoM」）について考えていた時だった。本作監督のサム・ライミは一九八一年の『死霊のはらわた』（以下、「はらわた」）で鮮烈なデビューを果たし、『スパイダーマン』三部作のメガホンをとったことなどで世界的に知られている。そんな彼の最新作である「MoM」は、シリーズものに途中参加したという背景がありながらも、彼の過去作品へのセルフパロディに満ちたライミファンのための映画でもあった。至る所で見えたライミ作品との類似性が印象に焼き付いていたため、私は次のような文章をまず書いてみたのである。

> 今回の敵役スカーレット・ウィッチは世界を守るための戦いのなかで愛する人を失っている。彼女は本来いるはずだった家族を求め、多次元世界（マルチバース）における別の宇宙で双子の兄弟の母親になった自分の体を乗っ取ろうとする。そのために霊体となって別の宇宙の「自宅」を覗くとき、彼女の一人称視点（POV）ショットが用いられる。これは『死霊のはらわた』シリーズにおいて多用された、浮遊する悪霊の POV ショット、とりわけ一作目において主人公アッシュたちのいる山小屋を窓から覗き見るショットを想起させる。また、『死霊のはらわた』においてこの悪霊の姿が最後まで観客には見せられないという点も類似する。アッシュ達を襲う死霊は、POV ショットの主としてのみ表現されたが、同じようにスカーレット・ウィッチの霊的身体もカメラの前には現れない。

これを書いたとき、ある疑念が浮かび上がった。このふたつの映画は果たしてそんなに似ているのだろうか。確かにライミの映画を少し見たことがある者なら、霊的存在の視点が手持ちカメラ独特の運動で表現されることにはすぐに気づくし、「「はらわた」とおんなじだ！」と言って喜びたくなるだろう。しかしこの表層的な類似に興奮しているとき、私はこの二つの映画には無限の差異が存在することをなかば棚上げにしてしまっていた。この「MoM」と「はらわた」は全く異なる映画であるという当たり前のことが、ライミとライミ的演出という結節点を以てぼやかされていたのである。そこで筆者は逆にこの二つの映画がどれだけ違うかを明らかにするために、類似していると思われた場面が何を映しているのかを書き出してみることにした。映画「について」書く前に、映画「を」書いてみようとしたのである。するとその目的に反して、一見したところの類似性の影に潜んで

いた別の類似性が発見されることになったのである。

次に記すのは、「はらわた」で山小屋を悪霊が覗くシーンである。紙幅の都合上、一ショットの途中までを描写している。

暗い空間の真ん中に、十字の枠がはめられた縦長の窓が映っている。窓は舞台である山小屋のものであることが分かる。カーテンは開けられ、抱擁しあい、キスをする男女が中に見える。カメラはその窓を離れ、ぎこちない運動をもって左側に移動していく。カーテンの閉まった同形の窓をひとつ通過し、小屋の角で90度曲がり、また別の窓を通して先ほどと同じ部屋が別の角度から写される。小屋の内部の照明は制限されており、中央奥に見える暖炉、その右手前側に並べられた二つの椅子、そして画面右手前側の空間それぞれの上から白色電球の光が注がれている。椅子のあたりで抱き合っていた二人が暖炉の前に腰を下ろすと、カメラはまた左側へ移動し、別の部屋を映す。

次は「MoM」の「類似」シーンである。

カメラがはるか上空からひとつの一軒家に迫る。ほとんど垂直方向のカメラの運動は窓の前で水平方向に急いでその方向を切り替える。映されている窓の白い格子状の枠の奥では白いカーテンが視界を遮っている。格子に区切られたひとつのブロックへとカメラは寄っていく。次の瞬間に素早く三つの映像がディゾルブされる。窓と大きく見開かれた女性の眼、そして家の内部の光景。まず窓の映像が消え、出てきて1秒も経たないうちにふたつの眼も消える。家の中の光景が残るわけだが、左側にはダイニング、右側にリビングルームが見える。カメラは反時計回りに30度ほど傾けられ、奇妙な浮遊感を醸し出している。二階へ続く階段の両脇に据え付けられた手すりの柵が視界を遮っている。階段を降りる方向、つまり映像右側には大きな家庭用ランプやテレビ、それに面するように置かれたソファが見え、二人の子供が座っている。手すりの柵のちょうど間から、子どもたちに寝る時間を告げる母親の姿が見える。この母親に注目するように視線が誘導されていると観客が気づくのは、彼女を中心に同心円状に映像がだんだんとぼかされているからだ。カメラは右側に移動し、階段がフレームから外れる。子ども達からアイスを食べた皿を回収し、左側のダイニングに向かう母親。同時に、カメラは少し後ずさる。ダイニングとリビングの間の空間で、母親が立ち止まると、およそ中央に彼女を捉えているカメラも微かに揺れながら止まる。何かに気づいたような素振りをした母親がカメラの方に首を回す。彼女の視線から逃れるように、カメラは元いた位置、階段の手すりの影に隠れ、再び柵の間から母親を捉える。

上の二つの文章は、私が各シーンを何度も再生しながら書いたものだ。当初の目的であった、二つの映画が全く違うものであることの再確認以上に、自分が何を見ていたのかがはっきりし、さらには映画を時間性から解放できていることに気がつく。たとえば、文中には「窓」がそれぞれ五回と四回登場し、筆者が窓の存在に注目したことが分かるが、このことは窓がどれくらいの時間スクリーンに映っていたかには関係しない。すなわち「MoM」において窓が登場するのは一瞬に近い出来事であるのに対して、「はらわた」において窓は悪霊が登場人物を眼差すときに必ず二者の間にあって相対的にかなり長

い時間映っているものであるのだが、文章のなかでは量的にほぼ等価に登場している。

では次に、これらの文章じたいを情報源のひとつとして映画を見てみる。ほとんど等しく現れる舞台装置である「窓」の役割に注目すると、新たな類似に気づくことになる。

「暗い空間の真ん中に、十字の枠がはめられた縦長の窓が映っている」とあることから、「はらわた」では窓がフレーム内フレームの役割を持つことが明らかである。それに対して、「MoM」では窓は束の間登場し、ディゾルブされて消えてゆくに過ぎない。しかしフレーム内フレームという役割に注目すると、「手すりの柵のちょうど間から、子どもたちに寝る時間を告げる母親の姿が見える」、「彼女の視線から逃れるように、カメラは元いた位置、階段の手すりの影に隠れ、再び柵の間から母親を捉える」という二つの文からその存在を見出すことができる。「はらわた」において窓枠が果たしていた役割を「MoM」では階段の手すりを支える柵が引き継いでいるのだ。

続いて、フレーム内フレームの効果のひとつが、観客の視線を誘導することであるという事実によって、われわれは「MoM」において「彼女を中心に同心円状に映像がぼかされている」ことに注目させるだろう。ぼかしを用いることで、フレーム内フレームの外の空間は明瞭には見えないようにさせられている。観客が見るように誘導される範囲は、大きなスクリーンの中でもますます限られた範囲になる。ここで「はらわた」について書いたのを再び確認すると、「小屋の内部の照明は制限されて」いることで視界が区切られているのが分かる。かくしてわれわれはフレーム内フレームと別の効果の併用による観客の視線の誘導という演出上の共通性を発見することができたのである。

以上の分析のあとで、再び一番ベタな類似点、つまりカメラの運動に戻ることでライミの映像戦略の両面性を明るみに出すことができる。先ほどはフレーム内フレームとミザンセンや特殊効果による視覚の制限が観客を誘導しているという機能的側面に注目したが、加えてこれらのショットがいずれもPOVショットとして撮られていたことを考えに入れる。すると、「一人称的視覚のシミュレーション」としてライミがこれらを操作しているということが可能になる。つまり、観客の視覚を誘導しているのと同時に、一人称視点ショットの主の「誘導された視覚」をも表現しているのである。ひとはある一点を注意深く見るとき、その周りにあるものや別の対象が眼に入らないことがある。しかしカメラは焦点の範囲に収まるもの全てを等価にかつもれなく映してしまう。カメラの能力に起因する映画の過剰なリアリズムに抗し、何かに集中した知覚の状態をシミュレートすることでライミはPOVをより真に迫った「一人称視点」ショットにしているのだ。

さて、われわれは映画を書くことによって見えていなかった類似性を発見し、ライミの職人的映像技法に気がつくことができた。次に「MoM」を見るときには、手すりのフレーム内フレームと映像のぼかしによって過剰に制限されていることに気づかずにはいられないだろう。

しかし、もしあなたがこの文章の筆者だったのならば、こうも思うだろう。「書かなくとも、何回か見れば気がついたことなのではないか」と。確かに今回最終的に分かったことは視覚的情報だけで十分に気がつけることであるように思われるし、わざわざ書くことを強調するまでもないのかもしれない。それでも「書くことによって見る」というプロセスにこだわるのは、既に気づいたことがいったん形をなすと、まだ気づいていないことを探せるようになるからだ。たとえば筆者は今回扱ったほんの短い場

面においてすら、音響や色そしてショットの時間の話をしていないが、こうした諸要素について考えようと映画を書くときに、われわれはもう技巧的な視界の制限に気を取られすぎることはないだろう。形になったアイデアは、新しい発見のための場所を空けてくれる。

また、詳しく映画を書くことで見るという、客観性を重視しているようにも見えるこの方法は、むしろ自分が何を見ていて、何を見ていないのかという観客としての自己を暴くことになる。映画そのもののおもしろさだけでなく、自らの映画観客的な癖を知ることになるのだ。そしてその積み重ねは、もっと多くのものを見ることができる観客にわれわれを育て上げるはずだ。

2023年の第17回文窓賞 学生レポートコンクールへの
作品応募を心待ちにしております。　　文窓会 一同

発 行

2022年10月30日
神戸大学文学部同窓会
文窓会
https://www.bunsokai.com/（文窓会）
http://www.lit.kobe-u.ac.jp/（神戸大学文学部）